

民官学の連携による地方都市中心市街地の将来ビジョン形成に関する研究

喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践 その6

民官学連携 将来ビジョン 中心市街地
まちなかプラン 喜多方市正会員 ○永瀬 節治* 同 早坂 勝一**
同 鄭 一止** 同 野原 卓***
同 柴田 直** 同 北沢 猛****
同 鈴木智香子**

1. 研究の背景と目的

わが国における地方中小都市のまちなか（中心市街地）は、モータリゼーションと郊外開発の進展に加え、少子高齢化・人口減少時代を迎え、活力を失い、地域全体の将来ビジョンを見出せなくなっている。

また従来からの行政による公共事業等は、現況を十分に考慮しないまま、継続して計画、実施されている。一方、市民レベルでのまちづくり活動も個別には進展しているものの、それぞれの活動が個別に行われ、相乗的な効果を発揮していない場合も多く、これらの連携を促す「場」づくりが求められる。さらに将来ビジョンの欠如そのものも、活動や事業間の連携を阻む一因となり、逆にビジョンはあっても実態に合わず、実際の施策や事業に反映されない場合もある。

そこで本稿では、民官学の多主体が連携しながら、まちなかにおける将来ビジョンを策定し、実現にまで持ち込む方法論について、福島県喜多方市を対象にケーススタディを行う。

2. 喜多方市の現状とまちづくりの動き

会津盆地の北部に位置する喜多方市は、人口約 56,000 人の地方中小都市である^{*1}。全市人口は近年横ばい傾向にあるが、まちなかにおける人口流出と少子高齢化は著しい。市内には 2,600 棟を越える蔵が存在し、「蔵とラーメンのまち」として全国的に知られるようになって以来、年間 100 万人を超える観光客が訪れるが、実際にはラーメンを食べに立ち寄る日帰り客が 9 割を占め、滞在型観光の確立が課題となっている。

行政においては、喜多方市都市マスタープラン（喜多方市）及び喜多方都市計画区域マスタープラン（福島県）が策定されているが、現状を踏まえた実効性のある戦略に乏しく、具体的なまちづくりに結びついていない。また TMO による事業展開も、多主体間の連携や長期的な視野といった面で課題が多い。

一方、民官学連携という観点からは、2001 年以降、東京大学都市工学科都市デザイン研究室（以下、当研究室）が実践的に地域と関わってきた。蔵をはじめとした地域資源をまちづくりに活用することを目的に、「蔵のフォーラム」（2001 年、2003 年）、「蔵みっせ」（2002 年）をはじめ、様々なまちづくりプロジェクトを実施している^{*2}。

また地域においては、1995 年に市内の蔵を愛する有志により「蔵の会」が結成され、上述した当研究室のプロジェクトにおいても密接な連携を行っている。さらに 2003 年には小田

付地区の住民により「会津北方小田付郷町衆会」が設立される等、住民側のまちづくり気運も高まりつつある。

しかし、個別の地区・主体の動きが活発化する一方で、
1) まちづくりに関わる多様な主体の連携の場がないこと
2) まちなか全体を包括する将来ビジョンがないこと
の 2 点が大きな課題となっていた。

3. 喜多方まちづくり研究会

このようなまちづくりの現状を踏まえ、各主体・事業が情報交換を行い、将来ビジョンを形成する場として、2005 年度に当研究室が中心となり「喜多方まちづくり研究会」（以下、研究会）を立ち上げた。研究会には、行政、商工会議所、TMO、さらに蔵の会や会津北方小田付郷町衆会、市役所通りを良くする会といった住民サイドの組織も参加し、各主体・事業の連携を促しながら、まちなかの方向性を明確にし、活動や事業の相乗効果を発揮することを目指した。

研究会の立ち上げに先立ち、同年 5 月に喜多方市の現状についての勉強会を行った。それを踏まえ、同年 8 月に行った第 1 回研究会では「まちなか居住」「交流人口増加」をテーマに将来のシナリオを提示し、意見交換を行った。同年 10 月に行った第 2 回研究会では、まちなかのシナリオをさらに詰めるとともに、「ふれあい通り地区」を中心的に取り上げ、当研究室による具体的な提案を元に議論を行った。一年の総括として行った第 3 回研究会（2006 年 2 月）では、それまでの議論を踏まえ、喜多方市中心部を構成する 4 地区のまちづくり方針についてまとめた「喜多方まちなかプラン」（次節参照）を提示し、テーマ・地区別の方向性や、事業の実現可能性、優先度等について意見を交わした。また多様な主体による議論の場

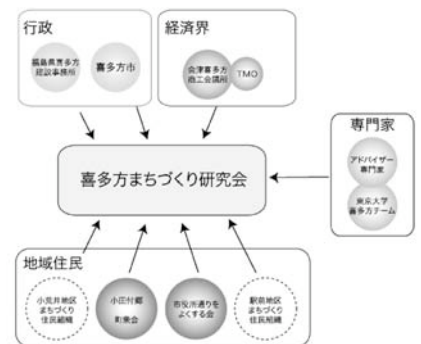


図1 喜多方まちづくり研究会の連携体制



図2 第1回喜多方まちづくり研究会の様子

の意義があらためて認識され、来年度以降も同様の議論の場を地元主導で継続することが確認された。

4. 喜多方まちなかプランと地区別プラン

もう一方の課題である将来ビジョン形成の観点からは、上記研究会を主体として「喜多方まちなかプラン」を策定した。

策定に際し、まちなかの人口動態や生活環境、地域資源、観光行動、商店主の意向や高校生の意識など、多角的な現況調査を行い、生活・観光の両面から課題と可能性を整理した。

その上で、まちなか全体の基本理念として「歴史・文化・自然を活かした持続可能なまちづくり」を掲げ、以下の3つの基本方針を位置づけた。

- 1) 喜多方の「蔵」文化、歴史を活かしたまちづくりの実施
- 2) 水と緑あふれる都市空間・都市環境の実現
- 3) 快適でコンパクトな「生活環境」の形成

さらに、交通・歩行者環境、街路空間、水・緑、住環境・公共サービス、観光、歴史・文化資源の6つのテーマ毎に目標と方針を定めた。

これらを踏まえ、まちなかの骨格となる主要な4地区（ふれあい通り、小田付、市役所通り、駅前）について、ハード・ソフト両面からの具体的な提案を盛り込んだ地区別プランを策定した。以下に各地区の方針を示す。

ふれあい通り地区：古くから喜多方の中心であった同地区は、喜多方のシンボルエリアとして位置づけ、蔵をはじめとした

まちの「個性」を磨くとともに、商店や医療・福祉施設等の生活サービス機能を充実させ、多様な「賑わい」を創出する。

小田付地区：ふれあい通り地区と同様に古い歴史を持ち、蔵の町並

みが継承された同地区では、伝統産業に利用された蔵のあり方を現代の住環境の側面からも再考し、喜多方らしさを体现する独自のライフスタイルを構築する。

市役所通り地区：市役所やラーメン店の集積による集客ポテンシャルを有し、付近の田付川で身近な自然を享受できる同地区は、市民・観光客共通の憩いのエリアとして、また車による来街者を想定した第二の回遊拠点として位置づける。

駅前通り地区：同地区の現状であるゆとりある空間配置を活かし、水と緑による潤いのある駅前空間創出を目指すとともに、交通拠点としての位置づけをあらためて行い、交通に対応したコンパクトな土地利用の展開を図る。

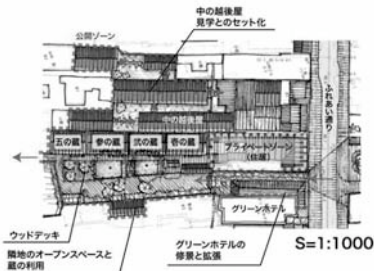


図4 蔵を活用する具体的な提案

5. まとめ：総合連携型まちづくりマネジメントへ

一連の研究会を通して得られた成果は以下の通りである。

第一に、民官学が一同に介し議論を重ねながらビジョンを策定することで、現在の喜多方市のまちなかで展開するまちづくりの動きの全体像が共有され、各主体間の連携を可能にする土壌が整えられた。

第二に、研究会での議論や共有された情報を基にまちなかプランを検討することにより、今まで曖昧になっていた将来ビジョンが、より明確な形で整理され、その共有に近づくことができた。またハード・ソフトに関する具体的な提案を盛り込んだことにより、具体的な内容に踏み込んだ分かりやすい議論が可能となった。

第三に、研究会での議論、情報を基にしながら、市役所通りを良くする会など、市民による地域組織の設立も見られるようになった。

第四に、各主体がプランを踏まえた活動・事業を展開し、まちなか全体の方向性が統合される萌芽となった。

さらに第3回研究会では、多様な主体による活動・事業をとりまとめ、資金面も含めたまちなかの地域づくり全体をマネジメントする組織の必要性も議論された。今後はそのような「総合連携型マネジメント組織」の実現と、同組織による具体的なまちづくりがいかに実行されるかが課題となる。

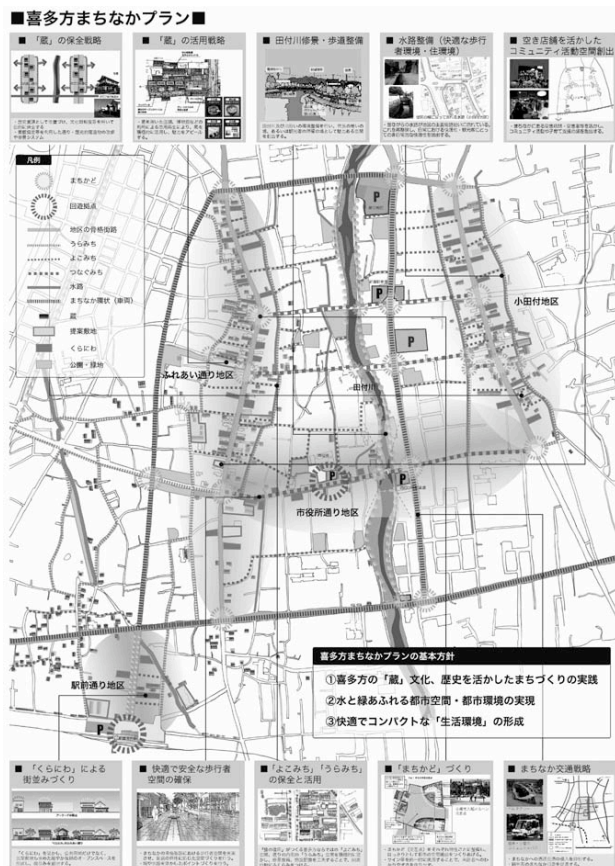


図3 喜多方まちなかプラン

* 東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻 博士課程
** 東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻 修士課程
*** 東京大学国際都市再生研究センター 特任助手
**** 東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻 教授

* Doctor Course, Dept. of Urban Engineering, faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
** Master Course, Dept. of Urban Engineering, faculty of Engineering, Univ. of Tokyo
*** Research Assoc., The Center for Sustainable Urban Regeneration, Univ. of Tokyo
**** Prof., Dept. of Socio-Cultural Environment, Grad. school of Frontier Sciences, Univ. of Tokyo